

Tama

多摩ニュータウン
ガイドマップ

New

Guide Map

Town

多摩ニュータウンは、東京都の多摩・八王子・町田・稲城の4市にまたがる多摩丘陵に計画された日本最大級のニュータウンです。高度経済成長期に都市部へ人口が集中し、深刻な住宅不足や乱開発が生じたことを受け、1965（昭和40）年に計画が決定され、1971（昭和46）年から入居がスタートしました。団地というよりもひとつの都市として、学校や病院、公園、商店街などが整備され、現在は約22万人が暮らしています。入居開始から50年以上が経ち、まちも人々の暮らしも少しずつ変化してきました。そうしたこれまでの記憶と営みをつなぐ、多摩ニュータウンガイドマップです。

わたしたちについて

S M A
studiomegane architects .inc



一級建築士の横溝惇と宮澤祐子を中心に、デザイナーなどが集う建築設計事務所。2017年に結成し、2018年からは多摩ニュータウンのど真ん中にある落合団地商店街に「STOA」という拠点を構えて活動している。



S T O A



名前の由来は、古代ギリシャ時代に市民が集う場所に建てられた列柱廊建築から。まちにひらかれた、地域の文化拠点となるような場所を目指している。棚にはアートブックレーベル「DOOKS」や古本「ミウラン」の書籍、駄菓子やお酒が並び、ときおり「醸す料理展」や「建築スナック」などのイベントを行っている。

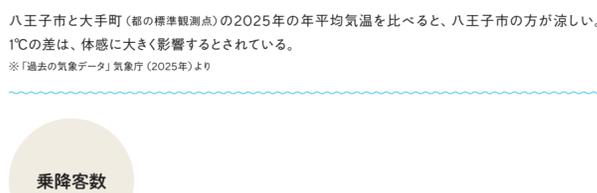
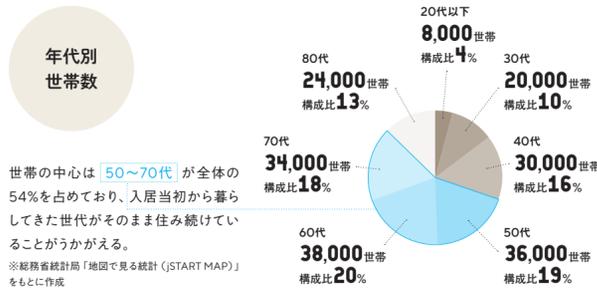
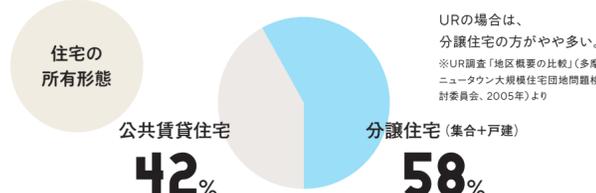


営業時間：水・金曜日 15:00～19:00
土・日曜日 13:00～18:00
住所：多摩市落合4-16-1-105
電話：042-400-6692

数字で見る多摩ニュータウン



東京都の高齢化率23.4%（東京都、2025年）よりはやや高いものの、日本全体の高齢化率29.3%（内閣府、2024年）よりは低い。ただし、地区別に見ると、高齢化率が40%を超えるエリアもある。
※人口に関しては、すべて「多摩ニュータウンの世帯数と人口について」（東京都都市整備局、2024年）より



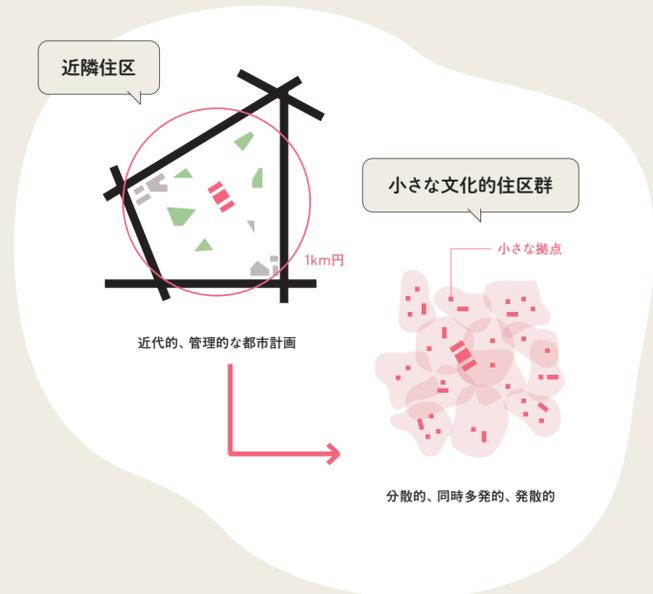
このまちを考える



多摩ニュータウンは、丘と谷、そして谷筋に流れる河川によって構成された多摩丘陵の地形に合わせて計画されています。線路から縦に伸びる谷筋にはバスが走る主要な道路が通され、丘を削ってつくった平らな土地には住宅を配置。各住区にある商店街のような「近隣センター」は、まちを縫うように、歩行者専用道路である「暮らしの横道」でつながっています。

計画の根底には、人口1万人程度の小学校区を中心とした住区に、商店や公園を配置していくという、郊外型住宅開発のバイブル、クレランス・アーサー・ベリーによる「近隣住区論」があります。この理論にもとづき、1住区に中学校1校と小学校2校、近隣センターが配置されることに。開発は諏訪・永山地区からはじまり、そこから隣の住区へと順に進められていきました。開発時期によって住区のつくられ方が異なり、その時代ごとの考え方が見てとれます。

※多摩ニュータウンは全21住区あるが、本紙では京王相模原線と小田急多摩線という2つの私鉄路線に囲まれた6住区を対象としている。



しかし、現在、少子高齢化や建物の老朽化によって商店が閉まったり、小学校が統廃合されたりするなど、これまでの考え方は対応しきれない状況が生まれています。

そこで考えたのが、「近隣住区」に対して「小さな文化的住区群」という考え方です。遊休不動産や空きスペースを「小さな拠点」としてまちなかに点在させ、そこから地域を読み直すことで、文化活動が同時多発的に生まれる、ゆるやかなつながりが育まれていくのではないかと。巨大な住区を小さな個人単位のスケールに引き寄せて捉え直し、「暮らしの横道」を通して、地域文化をつなぎ合わせていく。そうやって、多摩ニュータウンで新しいコミュニティを育む仕組みをつくっていきたくて考えています。

でも、どうやって？
それは、ぜひみなさんと一緒に考えていけたらうれしいです。

「暮らしの横道」からこのまちを眺める

多摩ニュータウンでは、かつて子育てをした世代が、小さな子どもを連れて親に声をかけてくれたり、遊歩道のオブジェやベンチにそっと落とし物が置かれていたり、人のあたたかさを感じさせる、このまちが育んできたふるまいがあります。わたしたちは、50年以上にわたるまちの記憶を受け継ぐこと、そして、暮らしのなかで見つけた「余白」を起点に活動を行ってきました。

ここでは、わたしたちが見聞きしてきた、このまちの記憶の一部をご紹介します。暮らしのなかに散らばる余白から、次にできることが浮かび上がってくるかもしれません。

1 スーパーマーケット 三徳多摩店

鶴牧にある、地域から愛されている老舗。イトインスペースからは団地群と橋や道路が一望でき、多摩ニュータウンらしい風景を味わうことができる。



3 恐竜橋

橋の柱につけられた、ステゴサウルスのような恐竜のオブジェは、1981年の完成以来、2〜3世代にわたってたくさんの人に触られてきた。まるで冒険のはじまりのような場所。



5 落合 ふるさと夏祭り



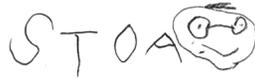
毎年7月、落合地商店街では、このエリアで唯一の神輿祭りが行われる。担ぎ手の会があり、日が暮れると盆踊りも行われ、祭囃気は下町さながら。

6 ライスステーション落合店

落合地商店街で長年お米屋を営む店主は、お客さんからまいいたすきなエピソードを、必ず次に来た人に話そうにしているそう。人気だったおにぎりは、コツを伝授してもらい、現在はSTOAに引き継がれている(不定期販売)。



4 STOA



13 露店の花屋さん

貝取地区では、ときどき店舗をもたない花屋さんが路上に店を出し、若い店主とおばあちゃんがわいわい話をしてる。



14 袋小路

貝取地区には、たぶん世界一小さい袋小路がある。歩行者と車を分離するために設けられたもの。このほかに、歩車分離の副産物として、歩道と車道の間に斜面が生まれており、その使い道を思案中。「小さな劇場」なんていいかも。



15 お汁体操

貝取北公園などでは、平日の朝は、6時半ごろからラジオ体操をするお年寄りが集まっている。幼い頃、6時に親を起こして一緒に通っていたという人も。



16 橋のまわりにある空き地

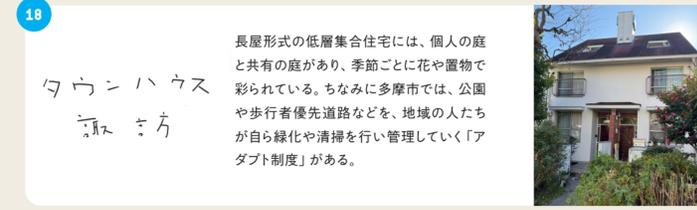
バス停の横にはほぼ必ず橋があり、橋の下や麓には空き地がある。屋台を出したりして、イベントや商いに使えそう。



17 まちのアカイブ収集プロジェクト

長屋形式の低層集合住宅には、個人の庭と共有の庭があり、季節ごとに花や置物で彩られている。ちなみに多摩市では、公園や歩行者優先道路などを、地域の人たちが自ら緑化や清掃を行い管理していく「アダプト制度」がある。

廃校になった旧東永山小学校に残された、思い出のかけらをレスキューするプロジェクト。卒業制作の木の彫刻や放送部の看板、観、体育館の舞台のカーテンなど、さまざまなものを救い出した。体育競技のハードルはベンチに生まれ変わり、現在はSTOAの入り口に置かれている。



19 ちいさな家

この一帯からさまざまなものが集まる、就労継続支援B型のリサイクルショップ。店内には地域の野菜や福祉団体による食品も並ぶ。使わなくなったものはここに持つていくのが、このまちで暮らす人たちの習慣。



20 紅葉狩り

紅葉の季節になると、遊歩道の橋の上から、老若男女が熱心に街路樹の写真を撮る光景が風物詩となっている。おすすめは、上之根大通り、諏訪の谷通り、いちよう橋、諏訪第六公園、一本杉公園。



掲示板

各地区の商店街や公園には、多摩市が管理する三角形の掲示板がある。非営利団体であれば、掲示物を持っていくと掲示してもらえます。



ベンチ

多摩ニュータウンでは、遊歩道や公園、商店街の至るところにベンチがある。ときおり、本を読んでいる人やもの思いにふける人の姿が。



7 SAJI

落合商店街にある古着屋では、70〜80代の第1世代が大事にしていたDiorなどのハイブランドのジャケットを買い取ったところ、それを選んだのはいまどきの20代だった。一方で、40代が20代の頃に着ていたワンピースを買い取ると、今度は80代のおばあちゃんが購入。また、価格表示のない子ども服を無料で持ち帰れる「おさがり文化」という取り組みも行っている。



8 中国料理 郷林

49年間、落合地商店街で町中華を営んできた店主のおばあちゃんは、KENZOの豹柄の毛皮コートに赤いハイヒールを履き、浅草から丘を登って、この地にやって来たのだという。2025年に閉店したが、店舗を引き継ぎ、新たなスペースを計画中。

9 豊ヶ丘南公園

公園の真ん中にある池は、工事中にコンボでできた水たまりが、そのまま池になったものだから。アヒルやカルガモの親子が泳ぎ、散歩に来た幼児が恐るおそる近づいていくのは、お馴染みの光景。



10 オーガニック・エテツブル コミュニティガーデン多摩

豊ヶ丘・貝取商店街横のポケットパークでは、恵泉女学園大学社会園芸学科が、授業の一環で食べられる植物を育てるコミュニティガーデンを運営。大根やジャガイモなどを収穫できる。その影響か、商店街では「ご自由にお取りください」と、家庭菜園でつくった野菜をお裾分けしてくるお店も。



11 豊ヶ丘・貝取商店街

会長さんが、花壇に手づくりのブリキの置物を置いたり、傘を設置して暴風から花を守ったり、野菜を育てたりしている。落合商店街から受け継いだ、あじさいの花が小さく咲いている場所もある。



12 多摩ランタンフェスティバル

毎年10月に開催される、市民参加型の大夜市。豊ヶ丘・貝取地区に1000個以上のたまのニューランタンが灯され、夜の暗いまちを歩きながら、新しい風景を発見していく。2019年にはじまり、3万人以上が集まる催しとなっている。

